

次期「長野県文化芸術振興計画」策定に係る有識者懇談会（第1回）

議事概要

日 時：令和4年6月9日（木）午後1時30分～3時30分

場 所：長野県庁西庁舎110号会議室

出席者：

（構成員）金井直氏（座長）、石川利江氏、小澤櫻作氏、北原節子、櫻井弘人氏、塚越亮氏、直井恵氏、ロジャー・マクドナルド氏

（長野県）県民文化部長 山田明子、県民文化部次長 池上安雄、文化政策課長 岩下秀樹、文化政策課企画幹兼課長補佐 小池貴浩

【意見交換】

（議題）

- ・2035年の長野県の姿を展望するなかで、文化芸術分野のめざす大きな方向性は何か
- ・上記を実現するために、次期計画期間の5年間でどのような施策や取組が必要か
- ・長野県の現状の文化芸術分野の課題

○ロジャー・マクドナルド氏

- ・2035年を考える際、この地球がどうなっているかと素朴に思う。
- ・2018年頃から気候変動の市民運動もやっており、佐久市望月で市民グループを立ち上げて、学校や様々な地域で毎月人が集まって、具体的なアクションを考えている。
- ・気候変動は日本ではヨーロッパほど報道されていないが、実際に災害も起きており、これから様々な現実的な影響がやってくる。
- ・フィンランドは「ネットゼロ」を2035年までの目標にしている。
日本は2050年と言っているが、パリ協定の2030年に（平均気温上昇）1.5度以下は達成できないと多くの科学者が言ってる。
- ・2月に出た科学論文では、2030年頃には、100年に1回の超熱波が1年おきぐらいの頻度で起きるとされている。
- ・このような環境問題に対して、芸術文化が強くリーダーシップをとるべきだと思う。
- ・アーティスト、芸術家、文化施設をリードする人たちは、自分達が先頭を切ってヴィジョンを示すものだと強く思うので、そういうリーダーシップを取れるような、文化政策が非常に大事である。
- ・長野県はいち早く気候非常事態宣言を出すなどアクションを行っているが、具体的にアートセクター、アート産業として脱炭素化をどうしていくのか、どう適応できるのか、文化芸術の観点からも考える必要性が高いと思う。
- ・県ができることとしては、助成金や、展覧会等を行う際に、サステナビリティを強調する作品等にインセンティブを与えることなど。
- ・一昨年カナダで気温が50度に達したという歴史的な熱波があったが、その際、ある町のコンサートホール、美術館、図書館がクーリングセンターとして無料で開放された。
日本でもそのような熱波が発生した場合に、文化施設がクールダウンできる施設に自動的

になるとか、災害対応と文化芸術がリンクする考え方が入ってくると、よりよいと思う。

○金井 直 氏（座長）

- ・持続可能性ではなく、むしろ持続不可能性とリアルに接する今、私達はどうかアートや文化と向き合うかという、現在形の生態学的な問いがあろうかと思う。

○直井 恵 氏

- ・人口減少社会のなかで、人が生きづらい社会になってしまっている。
- ・地域があまりに個々になりすぎており、地域が崩壊していく中で、上田の映画館など民間施設はギリギリの中で存続している。その地域の中でどうやって役割を担えるのか考えている。
- ・なかなかアートにアクセスできない子どもたちがいる。
いま切実に、交通費が出せないという世帯があり、大体がシングルマザーの家庭。
そのような世帯は今後も増えていくであろうから、どのような支援の形があるのか考えながら活動している。
- ・映画館（上田映劇）に来た子どもが学校で出席扱いになるという事例を作っている。
- ・映画館に来る子たちが「ここに来ると安心します」と言うが、その「安心」というワードは何か考えると、学校は評価されるということが前提となってしまうことがある。
- ・映画館とか美術文化は「自分がどう感じるか」ということで評価されることが大きい。今までの評価軸だけではないものを地域にたくさん置くことは、唯一の希望に繋がっていくのではないか。

○金井 直 氏（座長）

- ・今後も人口動態について厳しい予測がなされている中で、地域共同体の文化の継承は大きな問いであり、その記録も重要となる。

○櫻井 弘人 氏

- ・民俗芸能を専門にしているが、例えば遠山の霜月祭り等が10年後や20年後にいくつ残るのかという危機感を持っている。現に30年前は12あった祭りが今8に減少している。
- ・かつて斜面一帯に畑が広がっていた山村が、もう今は山になっており、廃屋が点在している。せつかく残してきた民俗芸能などの地域の文化が今なくなりつつある。
- ・大鹿村の御柱祭は、担い手の半分がIターンの方であるが、彼らが中心となって伝統的な形で祭りをやりたいと頑張っている。そこに一つの可能性が見いだせる。
- ・民俗芸能はその地域の中で、地域の人によって育まれた伝統文化であり、それはすなわち地域の歴史であり、地域の魅力である。これらをどう残していくかが大事だと思っている。
- ・また、民俗芸能の変遷を知っている方が今どんどん亡くなっていて、その芸能の持つ意味が分からなくなってしまっている。
- ・記録調査を行い、その民俗芸能が持っている価値を見いだすことが非常に大事ではないか。

○金井 直 氏（座長）

- ・学生が地域の調査に参加した際に、カセットテープを初めて使ったなど、一つ一つの事物との出会いも彼らにとってはよい驚きとなっており、現場の大切さを日々感じるどころ。
- ・記録を残すことやアーカイブ化もおそらくこの文化芸術振興計画の中で掲げるべきテーマではないかと改めて思った。
- ・文化芸術がどう役に立つかといった話ばかりでなく、文化芸術そのものの尊厳、人が生きてきた証を残し伝えることの意義も確認したいところ。

○小澤 櫻作 氏

- ・文化芸術活動は地球環境問題や経済問題、国際情勢、最近では新型コロナ等の影響を大きく受けやすいジャンルだと思っている。
- ・公共ホールを運営している立場としては、この2年間、アウトリーチやワークショップは止めざるを得なかった。
- ・2035年を考えると、かなり急がないと、頑張らないといけないと、現実的な危機感を持っている。
- ・ワークショップやアーティスト・イン・レジデンスがコロナ禍で足踏みしてしまったこともあり、公共ホールの次のフェーズはまだ見えていない。
- ・これらの計画をいかに実現して、持続可能なものに落とし込んで、多くの方が参加しやすくなる環境をいかに作っていくかというのが大切だと感じている
- ・そのためには、アーティストの育成はもちろん、アートスタッフの育成という視点も大切だと感じている。

○石川 利江 氏

- ・長野県は以前からアーティストが増え、展示の現場も増えたが、本当に社会の中でアートが位置づけられているかという点、決してそういう状況ではない。
- ・私達はこれから厳しい時代をどう生きていくかという時代に入っており、ネット社会が発達した中で逆に社会が不寛容になって、人が生きづらくなっているが、そういうときこそアーティストの役割とか表現する行為をする人たちの出番ではないか。
- ・いわゆるアーティストの生活状況は、余裕をもって暮らせる人は10%程度で生活は大変だが、ある種の豊かさを持っている。地域の中である意味で変わった人、違う価値観で生きている人の存在が、地域の風穴になったり、コミュニケーションが苦手な子どもや、若者の社会への接点になる可能性があると思う。
- ・アーティストたちは社会に対する先見性や、環境に対しての敏感さなどを持っている人が沢山いる。そういう人たちがもっと社会と関われる状況を作ってほしい。
- ・例えば学校教育で美術館に行った子どもたちに感想を訊くと、「美術館へ行くのはいいけど、感想文を書かされるのが嫌だ」といったことを言う。学校での芸術鑑賞教育がとても時代遅れのような気がする。
- ・欧米の美術館へ行くと、子どもたちがペタンと座り込んでいて、そこにとっても上手に説明して子どもたちを絵画などに触れさせる技術を持っている専門家たちがいる。
- ・学校現場にも優秀なファシリテーターが必要だと感じている。
- ・社会教育や学校教育と関われる人材として、アーティスト、学芸員などをもっとうまく活

用して、「長野県だからできるシステム」を作れないか。

- ・学校の先生だけでなく、アーティストと出会った経験は、「こんな変なおじさんでも生きていけるんだったら自分も大丈夫」って思ってもらえるかもしれない。

長野県に大小多様なアートの現場をつくるのがこれからの5年間でできると良いと思っている。

○金井 直 氏（座長）

- ・アーティストが持っている先見性を信じて、それを支えるような取組が必要である。
- ・美術館については、文化芸術基本法等の関係で、どちらかという軸足が「観光」に引っ張られているような印象がある。もう一方の軸として、社会教育や学校教育に自覚的に重心を預けてバランスを取っていく必要があるのではないか。

○直井 恵 氏

- ・文科省が教育機会確保法を制定し、学校現場以外の場所が学びの場として認められるというのを、2017年ぐらいから打ち出している。
- ・まだまだ浸透していないが、学校以外の場を認めていく流れがあるので、上田映劇の事例のように、美術館や文化ホールも十分に現場の受け皿になりうると感じている。

○ロジャー・マクドナルド氏

- ・元々美術館や文化施設はパブリックスペース（公共空間）であり、子どもやお年寄り、車椅子の人も含めて、県民が簡単にアクセスできるか、1回その視点に立ち止まることを、特に日本の美術館はやるべきだと思っている。
- ・月に1回や週に1回、半日など、無料で気楽に、ウェルカムなスペースを作っていくことで、「行きたい！」と思う子どもたちが増えてほしい。

○北原 節子 氏

- ・先ほどアートスタッフや専門家の話が出たが、伊那市でも一生懸命力を注いでくれる方がおり、色々な企画交流を行っていただいているが、高齢化が進んでいる。
- ・その人の後継の方がいるかというとなかなか難しい。若い方を呼ぶにはそれなりの収入がないと仕事として成り立たない。
- ・各地域のそのような専門人材をどうやって支えるか、後継の方たちをどう作っていくかは、伊那市にとっても大きな問題と思っている。
- ・子どもたちに対する文化芸術の点ではやはり、学校での部活動が大きいと思っている。
- ・スポーツ系は国から「地域で」と方針が出ているが、芸術文化の方についても国で「地域文化倶楽部」の検討が進められている。
- ・地域にその受け皿があるかというとなかなか難しい。場所とお金が必要であり、それを全部フォローできないと、なかなか子どもたちを集めることはできない。
- ・これから学校の部活ができにくくなって、美術や音楽ができなくなっていくと、ますます将来のアートを支える人材がいなくなるような、悪循環に陥ることを心配している。

○金井 直 氏（座長）

- ・教育の現場を含め、雇用の問題は非常に切実。ニーズがあってもそれに応えるだけの人材を地域が支える仕組みがなかったりする。文化施設の指定管理の実態も気になる。

○塚越 亮 氏

- ・文化芸術は単純にもっと身近に感じてもらえるものでいいのではないかという思いがある。
- ・我々（伊那食品工業）の「かんでんぱぱガーデン」も、食べる場所、買う場所に加えて、何か見ていただく場、日頃から慣れ親しんでいただく場を企業として作ることで、地域の文化レベルを上げられるのではないかと考えている。
- ・小学校の頃に伊那市に県民文化会館ができたが、そこで人生で初めて歌舞伎を観た光景をいまだに覚えている。文化芸術を身近にしたいと考え、企業として取り組んでいる。
- ・アートイベント等の情報は案外知らないという印象を持っている。
- ・子どもの視点で考えると、親御さんがそもそも芸術に興味がない場合、その子どもは残念ながら機会を奪われてしまう。
- ・情報の出し方や必然的な場作りは、学校を通じた情報発信等もう少しうまくできないかと
思っている。

○金井 直 氏（座長）

- ・街とギャラリーがシームレスに繋がることや、パブリックスペースとしての博物館や美術館に気軽に行ける空気を醸成することは、行政だけでなく、企業や一人一人の県民も含めてともに考えていきたいテーマ。

○石川 利江 氏

- ・県の施設や地域の美術館が、地域の人やアーティストにとって自分たちを支援したり、関わられるような拠点になっていない。
- ・アーツカウンシルの間接支援等によって、いろいろな所から想像もしなかったようなアートや活動家がたくさん出てくることを期待しているが、そのためには、文化施設に市民がいろいろな形で接点を持ち、出入りしやすくなるとよい。
- ・ボストンの美術館や博物館では、市民の専門的な解説ガイドを1年間ほどかけて講座を行って育成しており、ボランティアの解説ガイドは説明することにプライドをもっていると聞いた。文化施設にいろいろなボランティアが参加し、そこに地域マネー的に入場券の補助などが考えられるといいと思う。
- ・アーティストなどだけでなく、一般市民でもいろいろなことに触れたいと思っている人たちにとって、文化施設や美術館が拠点として機能するには何が必要かということも、この懇談会で考えていきたい。公共文化施設が血が通うようになるといいと思ってる。

○櫻井 弘人 氏

- ・アドバイザーを務めている南信州民俗芸能継承推進協議会で、地域の企業がパートナーになって地元の民俗芸能を支える「パートナー企業制度」という取組を行っている。
(登録数 100 社)

- ・金銭的支援や物的支援だけでなく、パートナー企業に勤めている従業員が地域の民俗芸能の担い手であったりするため、そのような状況にも配慮して、関わり合える形を作っている。
- ・宮崎県が同様の制度を立ち上げたところだが、なかなか自主的に動いていかないようである。
- ・民俗芸能の保存だけでなく、アートにおいても大きな枠組みで地域を巻き込んでいくような仕組み作りが必要だと思う。いかにして地域全体のものにしていくか、ということが非常に大事である。

○ロジャー・マクドナルド 氏

- ・佐久市でも5年計画や10年計画を策定しており、いろんなパブリックヒアリングをやっているので時々行くが、財政が厳しい時代のなか、行政はやはり予算を効率的に縮小し、中心化させる傾向にある。
- ・(佐久市)望月の図書館は5年計画の中で消える可能性が高いと言われているが、地元の人たちにとってはやはり嫌な気持ちになる。
- ・そのような中、公民館の再活用が一つアイディアとしてあるかと思っている。
- ・長野県は(人口10万人あたりの)公民館の数が日本一多く、望月出身の作家である小林多津衛(1896年-2001年)も1950年代に公民館の館長を務めている。戦後日本、特に長野県の公民館は実は非常に優れた芸術文化センターになっていたのではないか。
- ・公民館は非常に非中心的なモデルであり、低予算で100人程度の集落といったレベルで文化を広めていける。
- ・「マッシュルームのモデル」や「きのこ菌型」と言ってもよいが、木のような大きな所が長野市や上田市にあるだけでなく、その間に「きのこ菌」のように、低予算で、場合によってはソーラーパネル等により自己で資金を作るようなシステムもあり得ると思っている。
- ・公民館の21世紀型ビジョンとして、ある意味では戦前・戦後の日本でも行われてきた、ローカルに根付いた、レベルの高い公民館の利用も十分ありえる気がしている。

○金井 直 氏(座長)

- ・実際に公民館は地域活動を行うなかでいろいろな世代・職域の人と出会う場となっており、一緒に手や体を動かすことで、対等な関係を作りやすい側面もある。たまたまその地域に住んでいるということで、横と縦の繋がりが広がってく公民館活動の意義は大きいと思う。

○直井 恵 氏

- ・現在、逆にアジアに公民館活動が広がっていった事例もある。
- ・地域に元々あった寄り合いのような「講」というものが日本人由来の組織の形態としてある。戦後、公民館がGHQの政策の一環だったと聞いたこともあり、良し悪しではあるが。
- ・公民館には大きな可能性があると思うが、一方で先ほどの「血の通った」というキーワードが大事であり、システムにしてしまうことで忘れてしまうものがある。それが元々の土地の由来であると影響は大きい。
- ・子どもの話に戻るが、子どもの課題を考えたときに、「ジャンルを超える」というキーワー

ドが大事だと思っている。

- ・活動を行う中で、学校教育にアクセスしていれば、生活保護や母子寮世帯などの福祉にもまたがるし、医療・病院にも関係している。行政で言うところの省庁のようなものをどう超えるかが大事だと思っている。
- ・上田市では子どもを産んだ際に絵本をプレゼントしてくれる。子どもが大きくなっていくプロセスの中で、教育委員会や福祉課等が関わるなかで、連携を意識すると一緒に取り組めるものは実は多いのではないかと感じている。
- ・国にこども家庭庁ができる中で、文化芸術をどう連携していくのか気になっており、そういったところも議論できたらいいと思ってる。

【最後に一言】

○石川 利江 氏

- ・文化芸術が今まで抱かれていた、いわゆる芸術を楽しむといった面だけではなく、もっと社会の根っこや問題に結びつきながら、生きづらい人間を支えたり、社会に対流を起こす力であり、困難な時代のセーフティネットにもなれるというようなことを議論して、位置づけられるような方向性を持ちたい。

○小澤 櫻作 氏

- ・アーツカウンシルの活動の中で NPO を支援しているところがとても興味深い。
- ・消滅するかもしれない地域や文化、伝統芸能に目を向けるアーティストがいてくれたら、アートがすごく力を貸してくれる存在になる。それほどアートの力は大きいと思っている。
- ・アウトリーチやワークショップを地域で展開していく中で大切なこととして、学校や公民館に受け入れてもらうには、信頼が大前提となる。それがないとなかなか次のステップに進めない。
- ・NPO は活動が見えづらかったりするので、そこまで急には踏み込めない。その際に、公共ホールが担う役割は大きいと思っている。
- ・そのためには、大きな意味でのアートスタッフとして、NPO も、公共ホールのスタッフも、アーティストも、いろいろな方々が出会う場がもっと多くあった方が良く思う。

○北原 節子 氏

- ・行政でできる部分もあるが、行政にはない発想や企画について、市民の方や文化芸術に興味がある方たちと協力していくことが必要だと改めて感じた。
- ・文化芸術の施策が、垣根の高いもの、少し背伸びをしてやるようなものが多いように感じる。
- ・もう少し身近で、常に簡単に触れることができ、よく分からないけど自然に接しているものになっていくことがいいのではないかなと思う。

○櫻井 弘人 氏

- ・人口減少が非常に深刻な問題になっているなかで、今回のコロナ禍がある。
- ・結婚式にしても葬式にしても非常に簡略化されていて、人と人との接触の場が減っている。

- ・このコロナ禍は歴史の中で非常に大きな転換点になると思っている。そのような中であって、これからの5年間は本当に大事な時期になる。
- ・文化芸術を通して地域を守っていく、作っていく、そういう面でこの計画が何らかの力になれる、そういうものができればいいと思っている。

○塚越 亮 氏

- ・コロナ禍のせい、企業という立場だからか、ここ最近「自分の作品を寄贈したい」という問合せが多い。
- ・文化芸術の計画について議論するなかで、そういったものをどう扱っていくかについて少し話ができれば、何か面白い光が見つかるんじゃないのかと思っている。
- ・保育園でも学校でも、企業に飾るといったことでもいいが、文化芸術をフラットな形で、身近なものにするということにも繋がると思った。

○直井 恵 氏

- ・子どもたちと接していると、マスクを外せないという子がどんどん増えており、これから対話というものがどう成り立つのかと思っている。
- ・引きこもりの支援の現場でも、引きこもっていた年数だけ復活に時間がかかると言われており、今回のコロナも、子どもたちの元の姿を見るには、2年～3年と同じだけのスパンをかける必要性を感じている。
- ・5年の計画の中で、そういったことも見据える必要があるかと感じた。

○ロジャー・マクドナルド 氏

- ・佐久市望月の「平和と手仕事 多津衛民藝館」の運営に関わっているが、この「平和と手仕事」というキーワードは、これからの時代の文化芸術にとって非常に大事だと感じている。
- ・地域の中での人間同士の平和、あるいは自然界との平和をもう一回取り戻す、その平和という言葉の重みを感じる。
- ・「手仕事」という言い方も、アーティストではなく、手仕事と言うことによって、まさに民藝のような職人から、あるいは農業も入ってきて、多くのクリエイティブなことを行う人たちのことを指せる。そこには医者や企業も入るかもしれない。
- ・芸術文化をもっと総合的に考える、ホリスティックなものとして考えるという時代なのかと思っている。

(終)